**研究発表要旨**

**『海よ、海』論　　絵画が架橋するチャールズの語りと神秘**

**大槻　美春**

　『海よ、海』はマードック小説２６作品の１９番目、後期作品の第一作目であり、ボリュームが厚くなり、語りは雄弁である。記憶に残る数々の場面を絵画のように、あるいは舞台のように味わい、ときに小説の登場人物の視線の先にある観点から眺めると、小説は違ったものに見えてくる。マードックは、小説家、哲学者として有名だが、戦前の学生時代にはイタリア・ルネッサンス絵画の美術史家か画家になることを希望していたと言われ、視覚芸術は『海よ、海』に重要な位置を占める。

　『海よ、海』では絵画のように描写される数々の海の場面と共に、作品に実際登場する絵画が語り手チャールズの恋愛幻想と深くかかわり、チャールズの語りを豊かにしている。読者にとっては語り手の幻想であるものが、チャールズにとっては現実として見える像を絵画が取り結んでいる。「古いフレスコ画のアダムとイヴ」、ティツィアーノ作「ぺルセウスとアンドロメダ」、「ダナエ」の象徴は、チャールズの経験と意識にはっきりとした意味を与え、チャールズの内面を表象し、絵画の象徴がチャールズの意識の内的物語を繋いでいる。また、象徴は小説の一場面かぎりだけのものではなく、小説には絵画の遊びの世界がある。『海よ、海』の絵画のイメージと象徴は、イタリア・ルネッサンス絵画の楽しみの一つが象徴の謎解きにあったように、鑑賞に遊びの要素があり、読者にはチャールズの語りによる象徴の読み替えが可能である。

　チャールズの語りの意識の内的環境はプラトンの洞窟の比喩で表現される小説の舞台の外的環境と調和している。絵画という平面に閉じ込められたイメージで語られるチャールズの内的物語は、過去と現在との間の時間が抜け落ち、時間が排除された「歴史」の自伝物語である。歴史性の欠如した過去の純愛へのこだわりは、妄想に憑かれたとらわれの意識の内面を表す。チャールズの内的物語は、「メメント・モリ」が彼自身の人生の経験に組み込まれ、自伝の「歴史」の章をとじている。

　マードックは、従来のリアリズム作家、哲学作家、ポストモダンの作家のどの枠にも収まりきらないが、チャールズの語りの手法も同様である。語り手の意識の表象として視覚芸術が使われ、語りにはいくつかの語りの意識レベルがあり、小説の神秘は語り手の意識が覚醒しない変性状態の意識の語りが多く用いられる。語り手の外側は、語り手の観点とは違う観察によって、又、語り手自身の見る人物とは違う彼らの言動から描かれている。チャールズの内面と外側は区別して描かれ、そして、読者はその両面を理解することができ、真の意味では他の人間を理解することがないであろうチャーズの捕らわれの意識の内面が読める。『海よ、海』では、読者とは距離をおいて設定された意識の空間で、執拗で懲りることないエゴに生きる喜劇的語り手チャールズが善のもとに自らの魂を問い自らのエゴを語ってしまう。

　プラトンの洞窟の比喩の舞台の一幕が閉じる形で小説が終る事で、舞台が続くようにチャールズの人生も続き、チャールズの「魂の問い」の課題は、読者に預けられる。最後まで神秘とされた絵画「ぺルセウスとアンドロメダ」の怪獣に似たチャールズの見た海蛇の正体は、意識と心理がもたらした妄想の象徴として、捕らわれの意識は「死ある生」の人間存在の意識の宿命として描かれている。視覚的イメージで語られる自然と歴史的時間という人間ではどうすることもできない条件の中で、チャールズは絵画のテーマ「メメント･モリ」の限られた時間に生きる。チャールズの洞窟の舞台の外側にも人生があることを読者が意識するとき、チャールズの「魂の問い」の結果を、読者は笑うことができなくなる。

　読者の小説世界の想像の枠を広げる、小説に重層的に織り込まれたモチーフとイメージは、視覚芸術とも深い関係がある。